

災害時の発電で貢献するLPガス

「災害は忘れた頃にやってくる」とよく言われるが、忘れたいうちによつてきた能登半島大地震。しかも帰省した人ものんびりしていた元旦の夕方、停電に断水、冬の北陸は厳しい寒さで、被災者は大変な思いをした。LPガス（プロパンガス）のGHP（ガスヒートポンプ）エアコンが災害時に避難所になる学校の体育館などの冷暖房の空調として使われており、設置されていたところは、早速、役に立ち、病院などでは、LPガスの非常用発電機が稼働して、人の命を救ったという。

阪神淡路、東日本、熊本など、大きな地震などの後は、「災害時の備えは、必要」と、改めて思うのだが、次第に忘れて、防災用品や非常食の準備もおろそかになりがちだ。そういう中で起きた能登半島地震。しかし、近年は地震や水害、台風など、いつどこで災害が起きてもおかしくない状況が続いている。

能登半島の地域は、ほとんどがLPガス（プロパンガス）なのだ。停電が長い一方、LPガスは、数日で復旧し、不安の中で温かい食事が摂れただけでも被災者はうれしかったようだ。

また、能登半島地震のみならず、今までの大規模災害において、避

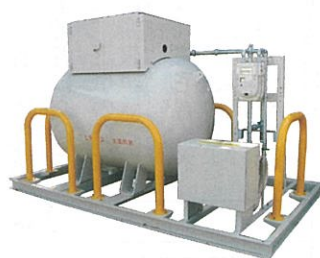
難所になった学校の体育館に、プロパンガスの「LPガス災害バルク貯槽」やGHP（ガスヒートポンプ）エアコンが設置されている

ところでは、被災者が寒さに凍えたり、熱中症の心配もなく、快適に過ごせているのだという。

そもそもプロパンガスは、分散型エネルギーであり、可搬性や貯蔵の容易性といった利点に加え、経年劣化しないという特性があることから、災害時に有益なエネルギーといえる。

プロパンガスで非常用発電

中でも一番効力を発揮するのが病院や福祉施設などに設置されたLPガス災害バルク貯槽と非常用



LPガス災害バルク貯槽
非常用発電機やGHP（ガスヒートポンプ）エアコンの動力エネルギーとして使われる

発電機。プロパンガスによつて電気を発電し、管内の冷暖房はもちろんのこと、酸素吸入や透析、手術室のライト、様々な計器、検査機、災害状況を把握する通信機などの稼働に役立つという。

治療を継続しなければならぬ患者や災害時の負傷者など停電してしまえば、命にもかかわる危険にさらされてしまうのだから、こういう災害の時の備えは必須だろう。まさに命をつなぐ「ライフライン」になっている。

経済産業省でも「災害時に備えた社会的重要なインフラへの自衛的な燃料備蓄の推進事業費補助金（災害時に備えた社会的重要なインフラへの自衛的な燃料備蓄の推進事業のうち石油製品利用促進対策事業のうち石油ガス災害バルク等の導入に係るもの）」を設けて支

援を行っている。

福祉施設や病院、役所、学校、工場、倉庫、公民館、コミュニティセンター、店舗、事務所、学校など幅広い用途の施設がこれまで補助金を受けている。

大規模災害時等において、避難困難者が多数生じる施設や公的避難所等の社会的重要なインフラの機能を維持するため、これら施設に燃料を備蓄するLPガス災害バルク等を設置する間接補助事業者に対しても当該経費の一部を助成。

中小企業者に対しては三分の二以内、大企業公共団体等に対しては二分の一以内。補助金上限額（一件当たり）は最大で五千万円。

詳しくは、一般財団法人エルピーガス振興センターのホームページを参照してほしい。



これは、施設に対する補助金で一般の人は関係ないと考えるのではなく、病院や福祉施設、公共的な施設、避難所に指定されている施設など、自分が使う施設が、災害時にどういう対応をしているのか、利用者としてきちんと知っておくことも大事なことだろう。